Ⅱ　研究の実際

1　視点①についての取組

様々な言語活動の設定の工夫と一人一人の考えをかかわらせる指導の工夫

○単元を貫く言語活動の工夫

単元を貫く言語活動は，「大好き」「知りたい」「伝えたい」という児童の意欲を引き出す課題解決的な活動になるように設定した。その際，本単元で付けたい力を意識しながら，児童の興味・関心をひくような名称にした。例えば，５年「百年後のふるさとを守る」の学習では，単元を貫く言語活動を，「自分の好きな偉人の伝記を読んで，そのよさを伝える『私の心をつかんだマイ人物事典を作ろう』」と設定した。「心をつかむ」というのは，伝記に登場する人物の行動や生き方について共感することを表しており，それが単元で付けたい力を意図している。また，「マイ人物事典を作る」ことは，児童の「知りたい」「伝えたい」という意欲を生かした言語活動となるとともに，自分と友達が共感したところを比べ合い，互いの違いに気づき，自分の考えを広げたり深めたりすることにもつながると考えた。

また，単元を貫く言語活動のほかに，一単位時間における「話す」「聞く」「読む」「書く」の言語活動を工夫することで，一人一人の考えをかかわらせていった。

○「なぜだろう」「もっとやりたい」など学習に主体的にかかわろうとする学習課題の設定

児童の初発の感想や疑問に加え，児童が読み進めていく中で新たに疑問に思うところを取り上げるなど，児童の疑問や興味・関心をもとに学習課題を設定した。このように児童側に立った課題を設定することで，児童は主体的に学習に向かうようになる。さらに，児童一人一人が自分の考えをもち，友達と学び合う学習課題とするためには，学習課題そのものの質が問題であることが明らかになった。そこでこれまでの実践を整理する中で，児童が主体的にかかわろうとする学習課題には，次のようなものがあるのではないかと考えた。

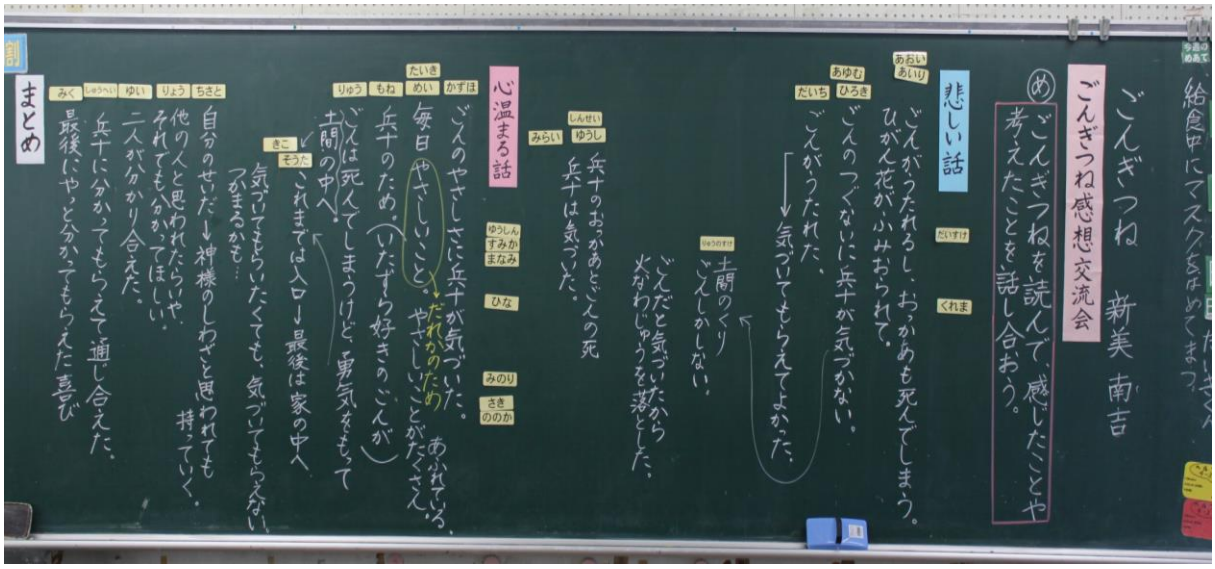
【学び合いを生み出す学習課題】

■対立型（ＡとＢ，どちらか）　■疑問型（なぜ～だろう），

■矛盾型（～のに，どうして～だろう）　■仮定型（もし～だとすると，どうなっていたか）

■驚き型（こんなに～なのは，どうしてだろう）

これまで，対立型の学習課題として「ごんぎつねは，悲しい話か心温まる話か，話し合おう。」（４年『ごんぎつね』），疑問型として「宮沢賢治が題名を「やまなし」にしたわけを考えよう。」（６年『やまなし』），矛盾型として「あんまり口をきいたことがない二人が，好きな女の子の話をしているのはどうしてだろう。」（５年『のどがかわいた』）などの実践を行った。



○考えを引き出し，意図的にかかわらせる場の設定（ペアトーク，グループトーク）

児童が自分の考えを発表し，友達の考えとかかわる場として，二人組で行うペアトークや班で話し合うグループトークを一斉学習の前やその途中に位置付けるようにした。これによって，互いの考えの違いに気づいたり友達の考えをヒントにして考えたりすることができ，それが学び合いにつながっていくと考えた。

また，児童が自分の考えを発表するとき「…だと思います。」や「…と書いてあるから～と思います。」のように，根拠や理由がはっきりしない発表が多かった。そこで，ペアトークなど自分の考えを発表するときには，考え―根拠―理由（付け）の三つを意識して話すように取り組んだ。この発表のしかたを身に付けさせることで，筋道を立てて考えたり，相手に分かりやすく話したりする力を育成できると考えたからである。この発表の仕方であれば自分と友達の考えの類似点や相違点が分かりやすく，その点から話し合うことができた。基本的な言い方は以下のようにしているが，学年に応じて言い方を工夫している。

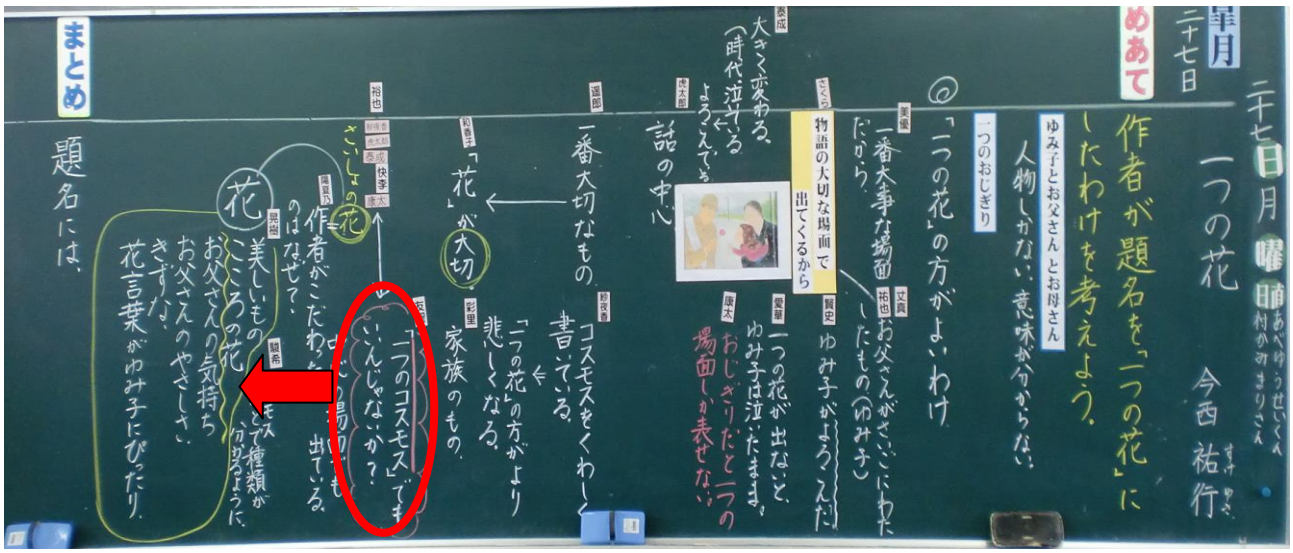
【考えを発表するとき】 考え：　～と思います。 根拠：　○○のところに，□□と書いてあるからです。○○が，△△したからです。 理由（付け）：　（根拠をもとに）ふつうだったら～～。（あるいは），自分だったら～～。

○「ゆさぶりの発問」の工夫

話し合いにおいて，児童らの考えが一つにまとまりそうなときに，教師が「本当にその考えでよいのか」というゆさぶりを行う。それによって，それまでその考えが妥当だと思っている児童らに対し，再思考を促し，話し合いがより深まっていくと考えた。ゆさぶる視点については，次の三点を考えた。

○「なぜ，そう考えたのか」という発言の根拠を尋ねる ○「もし～だとしたら，どうなのだろう」と仮定の場合を考えさせる ○「～なのに，どうして～だろう」と矛盾点を考えさせる

４年「一つの花」で「作者が題名を『一つの花』にしたわけを考えよう。」という課題を設定した際，児童はこの題名がいいという理由を，叙述をもとに根拠を示し，話し合っていった。その結果，「題名は『一つの花』がよい。」という考えにまとまりそうだった。ところが，教師の意図的指名により，ある児童から「『一つのコスモス』がいいのではないか。」という異なる意見を引き出し，「その意見についてどう思います。」と，これまでの児童の考えをゆさぶっていった。このゆさぶりの発問によって，児童はそれまではあまり気にしていなかった「花」という言葉の意味を考え始め，「コスモス」ではなく「花」とした作者の意図について再思考し，題名のわけに迫っていった。

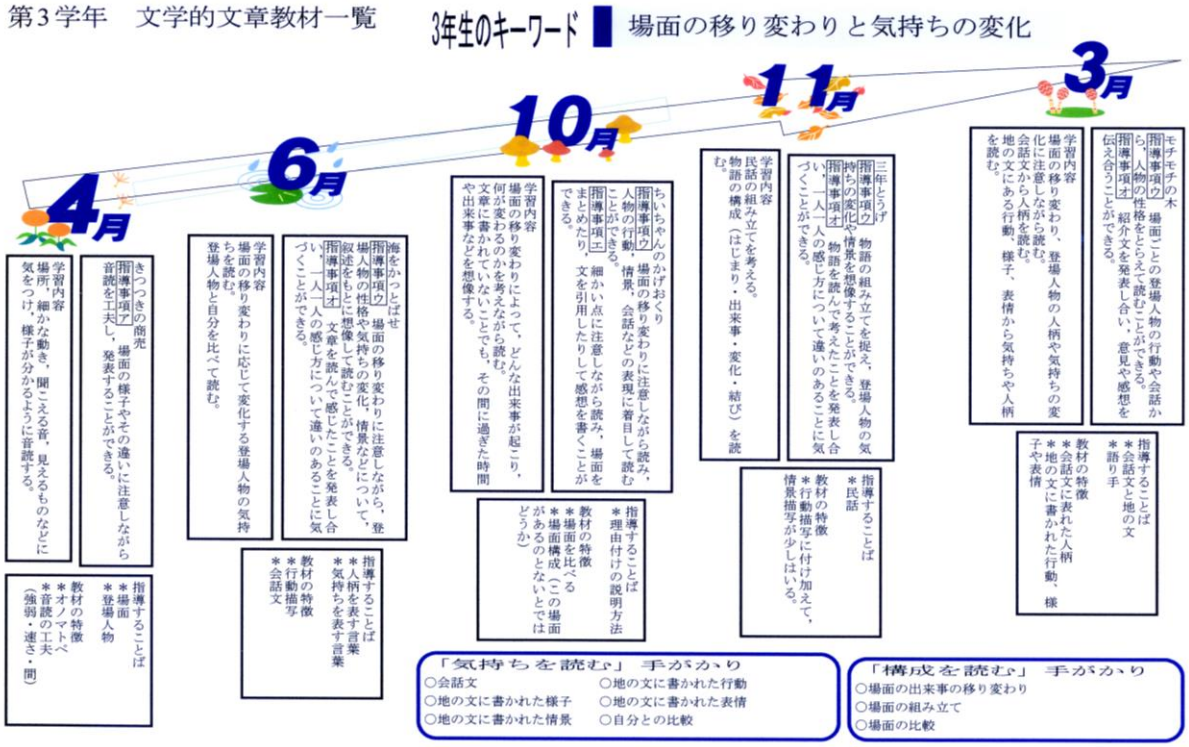


2　視点②についての取組

目標，指導及び評価の一体化と個に応じた支援と評価の充実

○児童の実態を踏まえた単元の指導計画の作成

各学年で学習する文学的文章教材の単元における指導事項を，時系列に見ることができるように表に示し，単元毎に身に付けさせたい力を示すなど系統的に見ることができるようにした。



この指導事項の一覧表をもとに，児童の実態をとらえたうえで，単元の指導計画を作成するようにした。また，年間の単元を見通すことで，それぞれの単元における「単元を貫く言語活動」についても，内容や系統性が考慮できるようになった。

さらに，文学的文章教材における指導では，この単元を貫く言語活動を設定することによって，第二次の読みの学習の仕方を工夫した。そこで，文学的文章教材の基本的な指導過程を次のように設定した。

【基本的な指導過程のイメージ図】

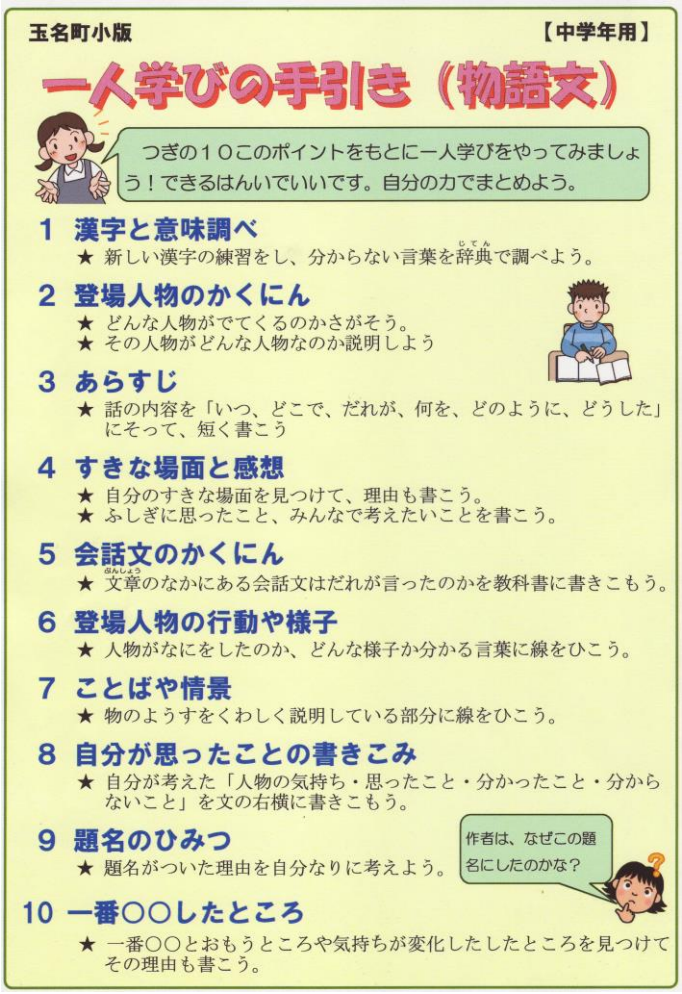
第一次 見通しと基礎的な読み	第二次 学び合いを通した読み （観点毎に読む，場面毎に観点を入れて読む）	第三次 まとめる読み 広げる読み
○単元のゴールを示し，見通しをもつ ○初発の感想（感じたこと・疑問・好きなところ） **○全文を通した基礎的な読み（一人学び）**	○人物の設定 ○登場人物の関係 ○心情（の変化） ○情景・場面の様子 ○主題にかかわるもの **単元を貫く言語活動** （言語活動を通して，言語事項を指導する） ※少しずつ単元のゴールに近づいていく ○**じっくりと読み深めるための読み（一人学び）**	○教材文で読み取ったことをまとめる ○別の本で読む観点をもとに広げて読む
○単元のゴールを示す ○ワークシート	○付けたい力の明確化（１年間の系統） ○交流のための話形（ペア，班，全体）	○単元のゴール ○読み方の振り返り

○一人学びの時間の設定と自力解決における支援の工夫

これまでの一単位時間における話し合い学習では，児童一人一人に自分の考えをもたせて，話し合い活動を行ってきた。しかし，それぞれの意見の出し合いになって，深めることができなかった。

そこで，特に児童に話し合わせたい学習課題のときには，児童一人一人が文章をじっくりと読み込み，自分の考えの根拠や理由をはっきりするための時間となるように，指導計画の中に一人学びの時間を位置付けるようにした。

また，単元の導入段階において作品を大まかにつかむために「一人学びの手引き」の活用を図った。そこでは，手引きに示されたすべての項目に取り組むのではなく，その単元で重点的に指導を行う項目に絞って取り組ませた。そして，児童一人一人が文章をじっくりと読み込み，自分の考えの根拠や理由をはっきりさせるための一人学びの時間を行うか，作品を大まかにつかむために「一人学びの手引き」の活用を図るための学習を行うかは，単元の指導内容や児童の実態等に応じて選び，指導計画に位置付けた。どちらの場合も教師は，児童一人一人が学習に意欲的に参加できるように支援を行った。


玉名町小版　【中学年用】

一人学びの手引き（物語文）

つぎの１０このポイントをもとに一人学びをやってみましょう！できるはんいでいいです。自分の力でまとめよう。

1 漢字と意味調べ
★ 新しい漢字の練習をし、分からない言葉を辞典で調べよう。

2 登場人物のかくにん
★ どんな人物がでてくるのかさがそう。
★ その人物がどんな人物なのか説明しよう

3 あらすじ
★ 話の内容を「いつ、どこで、だれが、何を、どのように、どうした」にそって、短く書こう

4 すきな場面と感想
★ 自分のすきな場面を見つけて、理由も書こう。
★ ふしぎに思ったこと、みんなで考えたいことを書こう。

5 会話文のかくにん
★ 文章のなかにある会話文はだれが言ったのかを教科書に書きこもう。

6 登場人物の行動や様子
★ 人物がなにをしたのか、どんな様子か分かる言葉に線をひこう。

7 ことばや情景
★ 物のようすをくわしく説明している部分に線をひこう。

8 自分が思ったことの書きこみ
★ 自分が考えた「人物の気持ち・思ったこと・分かったこと・分からないこと」を文の右横に書きこもう。

9 題名のひみつ
★ 題名がついた理由を自分なりに考えよう。

作者は、なぜこの題名にしたのかな？

10 一番○○したところ
★ 一番○○とおもうところや気持ちが変化したしたところを見つけてその理由も書こう。

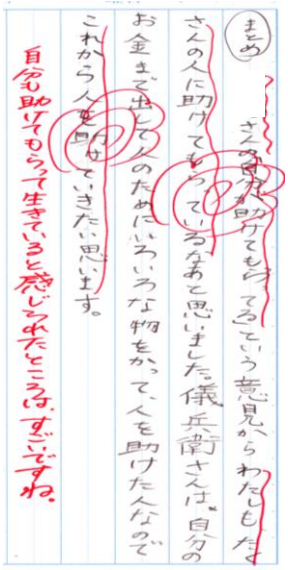
○一人一人の考えのよさを認める発言や教師の価値付け

児童の話し合いが発表だけに終わらず，前の人の発言を受けて「○○さんと似ていて」と発言することを促すことで，それぞれの考えがつながり合うようにしていった。また，児童が自分の考えと異なる考えを否定的にとらえるのではなく，教師が補足したり説明したりしていくことによって，その考えのよいところに気づくようにし，話し合いを深めていくようにした。

○学習の目標とかかわらせた感想と交流

本時の学習の内容をまとめるために，一単位時間の中に必ずその学習を振り返る場を設定した。本校では，学習をまとめるとともに，自分の考えの深まりや広がりに気づかせる場としてもとらえている。

発表できなかった児童については，書かれた感想に教師が言葉かけ（コメント）をすることで，伸びを認めていくようにしている。


まとめ
「さんの人に助けてもらってる」という意見からわたしもたくさんの人に助けてもらっているなあと思いました。儀兵衛さんは，自分のお金まで出して人のためにいろいろな物をかって，人を助けた人なのでこれから人を助けていきたい思います。
自分も助けてもらって生きていると感じられたところ，すごいですね。